

「南傳大藏經」に對する

望蜀のことは

舟 橋 一 哉

この頃少しく「南傳大藏經」を繙く機會に恵まれたので、これを利用する者の立場から、氣のついた點を二三ならべて見る。總てはあとのまつりで、今更言うて見ても仕方のないことではあるが、今後同じやうな企てが計畫されたとき、何等かの意味で参考ともなれば幸甚である。

一、標題について。

單に「南傳大藏經」とのみはずに、「和譯」とか「邦譯」とかいふ語を冠らせて欲しかつたと思ふが、それはよいとして、背に記された見出しの文字と内の題號とが必ずしも一致してゐないのはどうした理由によるものか。例へば「律藏」といふ見出しの下に含まれたものが五卷あるが、内題ではそれ／＼「律藏一」、經分別一乃至「律藏五、

附隨」と記されてゐる。一體、「律藏」といふ見出しは奇怪至極で、この調子で他のものへも及ぼして行けば、「經藏」「論藏」「藏外」の四部類の中へ全部含まれてしまふことになる。經藏において、それ／＼「長部經典」「中部經典」といふ風に細分してその名を出してゐる以上、こゝも「經分別」とか「附隨」とか言つた見出しを背文字に入れた方がよくはないか。尤も「長部」とか「中部」とかは經典の名であり、「經分別」とか「附隨」とかは律藏の區分であつて、律藏の名ではないかも知れないが、それでも「律藏」といふ見出しをつけるよりはましである。それから「小部經典」といふ見出しのものが二十二卷あるが、内題ではそれ／＼「小誦經」「法句經」乃至「小義釋」と記されてゐる。「長部經典」「中部經典」等の名稱に對すれば「小部經典」だけでもよいが、内題と一致せしめる爲にも、又實際にこれを利用する場合の便宜を考へて見ても、それ／＼「小誦經」「法句經」等とした方がよい。二十二卷の中で入用の一卷を探すには骨が折れる。次に論藏中にはその和譯の名稱の適當でないものがある。例へば「分

別論」とか「法集論」とかいふ様に一一に「論」の字を追加してゐるのであるから(恰も「小誦經」「法句經」等と「經」の字を追加した如く)、「論事」は「論事論」といふべきであらうし、「界論」は「界論論」といはなくてはならない。

「界論論」が具合悪ければ、從來用ひられて來た譯名「界説論」でよい。さうすると「論事論」も「説事論」といつた方がよいのかも知れない。因に言ふ、論藏の和譯に於てその註釋をも加へて和譯せられたものもあるが、大部分は註釋がない。これは經藏の場合と異つて、註釋なしでは殆ど意味がないのであるから、是非とも註釋の出版を企てなくてはならない。

二、底本について。

殆どすべてがローマ字版を底本として、泰國皇室版を参照してゐるが、中には泰國版を底本としたものもある。しかしそれにはそれ相應の理由もあることであるから、底本の不統一といふ難點は難點として、これはこの儘承認せられてよい。私は一層のことすべて泰國版を底本にしたかつた。泰國版がいかに勝れてゐるかは、故荻原博

士によつて屢々唱導せられたと聞いてゐる。總じて巴利聖典の解讀には是非ともこれを参照する必要があるが、殊にローマ字版の不完全な論藏やその註釋に於て、このことは一層緊要である。ところが、中には充分に泰國版を参照してゐないものもある。一例を分別論にとつて見よう。(特に分別論の翻譯が出来であるといふのではないが)

分別論の一七八頁に二十二根の諸門分別をなしてゐる中、「十根は欲塵、三根は非欲塵、九根は兩方に通ず。十三根は色塵、九根は色塵と非色塵との兩方に通ず。十四根は無色塵、八根は無色塵と非無色塵との兩方に通ず」といふ意味のことが記されてゐるが、これは間違ひで、この儘とすると、欲塵のみのもの十根、色塵のみのもの十三根、無色塵のみのもの十四根で、これだけで既に三十七根となつてしまふ。泰國版によると、「十三根は非色塵、十四根は非無色塵」としなくてはならない。このことについて分別論の註釋は何も言つてゐないので役に立たないが、清淨道論四九三頁(ローマ字本)を見ると、欲

塵なる十根とは眼・耳・鼻・舌・身・女・男・樂・苦・憂の諸根であり、それに三無漏根を加へた十三根は非色塵であり、更にそれに喜根を加へた十四根は非無色塵であり、又その三無漏根が非欲塵なる三根であることが解る。他は推して知ることが出来る。

三、譯語について。

多くの者が分擔して翻譯するとき、ある程度譯語の不統一は脱れ得ない。しかしこれも事前に打ち合せをする（例へば屢々使はれる語の譯例を定めて印刷したものを譯者に配布する等の）ことによつて可成りの程度まで排除出来るのではないだらうか。殊に論藏及びこれに屬するものにあつては、語が型にはまつて動きのとれないものになつてゐる關係上、是非とも譯語を一定する必要がある。原本を見ないで和譯だけに頼らうとする一般讀者にとつて、これは致命傷でもある。總じて私は漢譯語のあるものはこれを採用して、濫りに新しい譯語を造らないことに賛成する。もし漢譯語が極めて不適當である場合は、なるべくこれに近い語でしかもその意味を表は

すに相應はしいものを求めるべきであらう。長年佛教によつて培はれて來た漢譯語には、短い言葉では盡ひ盡せない微妙な味があるからである。